

父親の育児参加への意識と育児行動

五十嵐 久人¹⁾ 飯島 純夫²⁾

目的：母親の望む育児行動が、父親の育児行動と一致しているのか、父親の育児行動への評価や父親の育児参加への意識、行動を知ることが目的とした。

対象と方法：山梨県A市(農村地域)とB町(県庁所在地のベッドタウン)の1～2歳児を持つ父親、母親を対象とした。父親と母親の見解の相違が考えられるため父親と母親用の2種類のアンケート用紙を作成した。A市では郵送法、B町では乳幼児健康診査時にアンケート用紙を配布し、郵送にて回収した。対象数は、A市では配布時に1～2歳児であった全数の348組、B町では健診受診者の143組である。

結果および考察：育児期間中の父親の役割として「直接的な育児支援」について、父親と母親の回答に差が認められ(A市： $p < 0.01$ 、B町： $p < 0.001$)、母親はより直接的な育児支援を望んでいることが示された。「しつけを行う」ではB町のみ($p < 0.05$)で差が認められた。また、父親、母親共に「妻の良き理解者となる」という回答が最も多く、精神的な支持を重要なことと考えていることがわかった。

キーワード：父親 育児 育児参加 育児行動

緒言

近年の父親は、以前に比べて育児に対して協力的になってきていると言われており、宮中ら¹⁾も「育児参加することがごく自然に浸透してきている」としている。しかし、母親にとって核家族化や隣人関係の希薄化といった育児環境の変化や父親不在、育児は母親まかせといった状況などは、相談相手や協力者もなく孤独な育児環境となり、心身への大きな負担となると思われる。川井²⁾は「育児というのは、子供の命を守り、心身の発達を助け、その健康増進をはかり、社会の中で生活していけるように育てること」としており、親としての役割は大きい。育児には身体的、精神的、社会的などの要因が複雑に絡み合っており、母親のみでこれらを成し遂げることは難しいであろう。

このような状況から、母親の負担軽減を図るため母親の最も身近にいる父親が育児においてその役割を果たしていくことが必要不可欠と思われる。

大藪ら³⁾は「育児の満足感には父親や他の人のサポートが必要」とし、高橋⁴⁾は母親のあげる育児の不満の原因として「父親の支援の欠落に問題がある」としている。

父親の育児参加が母親へどの程度の満足感を与えているのか、母親が求める育児への協力とはなにかを把握することで父親に求められている役割を見つけることができるものと考えられる。本調査は父親の育児に対する母親の望む育児行動が、父親の育児行動とどの程度一致しているのか、母親が父親の育児行動に対してどのように受けとめているのかなどを分析することを目的とし、そこから、父親の育児参加への意識を把握し、育児参加を促す

方法を検討する。また、本調査では出生直後など父親が積極的に関わると考えられる時期を避け、育児における役割分担や意識が定着してきていると思われる1～2歳児を持つ父親の行動に視点をあて、夫婦に対して調査を行うこととした。

また、地域差の可能性を考え、A市とB町という地域特性の異なる2地域で調査を行うこととした。

対象と方法

1 対象

対象集団は山梨県のA市、B町に在住する1～2歳児を持つ父親、母親である。A市においては郵送法を用い、B町においては1歳・1歳6ヶ月・2歳児を対象とした健康診査時に会場のB町保健センターにてアンケート用紙を配布し、母親用のアンケートはその場で記入してもらい、父親用のアンケートは自宅で記入してもらい郵送にて回収した。対象者数はA市では配布時に1～2歳児の全数の348組、B町では143組である。なお、A市は人口約3万人、出生率10.1の果樹園の多い農村地域であり、B町は人口約4万人、出生率13.1の県庁所在地のベッドタウンで新規転入者も多い地域である。(出生率は平成10.4.1現在)

父親だけの視点では母親との見解の相違が生じると考え、回答の信頼性を確認するため、文献などを参考にし父親用、母親用の2種類のアンケート用紙を独自に作成した。また、上記のように地域特性の異なる2つの地域からのアンケートをとり、地域間による違いの有無を確認すると共に比較するデータとした。

調査期間はA市：1998年9月24日～10月10日、B町：1998年9月11日～10月22日である。

1) 長野市保健所健康課 西部保健センター

2) 山梨医科大学 地域・老人看護学

2 調査内容および分析方法

父親用のアンケート項目は、対象者の基本属性(7項目)、父親の育児行動(12項目)、育児に関する意識(3項目)、評価(1項目)の計23項目からなり、母親用のアンケート項目は基本属性(5項目)、父親の育児行動(12項目)父親の役割(2項目)、評価(1項目)の20項目で構成されている。

データの集計、分析にはExcelならびに統計パッケージHALBAU for Windows Ver5.39を用い、違いの有無については χ^2 検定を用いた。

結果

A市では返信総数147通(有効回答144通)で回収率は42.2%であった。B町では返信総数73通(有効回答71通)で回収率は51.0%であった。

背景要因(表1)として、核家族の割合がB町では高く、拡大家族はA市で多かった($\chi^2=15.29$ 、 $p<0.001$)。また、会社員の割合はB町で高かった($\chi^2=9.76$ 、 $p<0.01$)。「立会い分娩群」「計画妊娠群」共に父親の育児参加への積極性とは関係が認められなかった。

表1 対象者の背景要因

項目	A市(n=144)	B町(n=71)
平均年齢(歳)	父親	33.26±5.14
	母親	30.44±4.11
出生順位	第一子	78(54.2%)
	第二子以上	66(45.8%)
家族形態	核家族	87(62.3%)
	拡大家族	55(38.7%)
職種	会社員	79(54.9%)
	公務員	16(11.1%)
	自営業	15(10.4%)
	教員	10(6.9%)
	農業(専業)	8(5.6%)
	農業(兼業)	2(1.4%)
	その他	14(9.7%)
	妻の職種	専業主婦
	有職者	51(35.4%)
立会い分娩群	36(25.0%)	17(23.9%)
計画妊娠群	75(52.1%)	35(49.3%)

** $p<0.01$,*** $p<0.001$

以降、A市、B町共に類似した結果が得られたものについては、まとめて表記することにした。

父親の(直接的な)育児行動(表2)として、「話し掛ける」が最も多く約80%の父親がよく行っていると回答し、次いで「抱っこする」「入浴させる」などとなった。反対に「おむつ交換」は最も低く約20%となり、次いで「散歩に行く」「寝かしつける」などが低い結果となった。

育児についての学習方法は、A市では84%、B町では94%の者が育児に関する本、雑誌としており育児学級といったものはA市、B町共に約10%と低率であった。

父親の育児への参加状況として、「よく参加している」「どちらかと言えば参加している」と答えているのが父親自身、母親ともに80%を超えており、残りの10~20%が「どちらかと言えば参加していない」「全く参加していない」という結果であった。前者の参加理由として「子供

表2 父親の直接的な育児行動(よく行っていると答えたもの)

項目	A市		B町	
	父親(n=143)	母親(n=144)	父親(n=70)	母親(n=71)
話し掛ける	111(77.8%)	108(74.8%)	54(77.5%)	52(73.5%)
抱っこする	89(62.0%)	90(62.5%)	40(57.7%)	39(54.4%)
入浴させる	90(63.2%)	84(58.3%)	37(53.5%)	38(52.9%)
目を見つめる	79(55.2%)	78(54.2%)	31(44.9%)	44(61.8%)
泣いた時あやす	67(47.2%)	60(41.7%)	28(39.4%)	30(42.6%)
おもちゃで遊ぶ	54(37.5%)	53(36.8%)	33(46.5%)	27(38.2%)
うたを歌う	28(19.6%)	35(24.3%)	17(24.3%)	17(23.5%)
寝かしつける	37(25.7%)	34(23.8%)	13(18.6%)	11(15.7%)
散歩に行く	39(27.5%)	32(22.2%)	16(22.3%)	19(26.5%)
おむつ交換	40(27.8%)	24(16.8%)	8(11.4%)	15(20.6%)

表3 父親の参加・不参加理由(複数回答)

項目	A市(n=141)	B町(n=70)
参加理由:		
協力するのは当然	59(41.8%)	30(42.9%)
妻だけでは大変そう	66(46.8%)	30(42.9%)
父親の関わりは育児には大切	71(50.4%)	29(41.4%)
時間的に余裕がある	18(12.8%)	5(7.1%)
妻だけでは心配	9(6.4%)	6(8.6%)
子供と一緒にいたい	85(60.3%)	33(47.1%)
夫婦共働きのため	20(14.2%)	9(12.9%)
妻に言われている	18(12.8%)	9(12.9%)
不参加理由:		
仕事が忙しい	9(6.4%)	9(12.9%)
子供の扱いがわからない	1(0.7%)	1(1.4%)
育児は母親の役割	1(0.7%)	0
妻がよく面倒を見る	7(5.0%)	6(8.6%)
他に手伝ってくれる人がいる	4(2.8%)	0
育児の代わりに家事を行っている	1(0.7%)	1(1.4%)
疲れる	3(2.1%)	3(4.3%)

と一緒にいたい」が最も割合が多く、次いで「妻だけでは大変そう」などとなっていた(表3)。後者の不参加理由として「仕事が忙しい」が最も多く、次いで「妻がよく面倒をみる」となっていた(表3)。

母親へ「父親と子供のことについて話をするか」と言う質問に対して「よくする」約75%「時々する」約20%「あまりしない」約2%であった。また、傾向として、よくコミュニケーションをとっているほうが父親への評価が高くなっていた。

父親も育児に直接的に参加すべきと考えているのは、父親は約60%、母親では約80%と20%の差があり母親はより直接的な育児参加を望んでいる傾向であった。しかし、「どちらかと言うと参加すべき」と言う回答まで含めた場合、父親、母親ともに90%を超えており双方とも参加すべきという意識が高いことが示された。

育児期間中の父親の役割(表4)として、A市、B町とも父親からは「(直接的な)育児支援」という答えが低い傾向にあったが、母親からは高率で示されており回答率の違いが見られた(A市: $\chi^2=8.03$ 、 $p<0.01$ 、B町: $\chi^2=19.27$ 、 $p<0.001$)。家事という項目は母親、父親ともに低い結果であった。また、A市の専業主婦の回答では父親へ家事を望んでいる者は少なく、反対に仕事を有している母親では父親に家事を望んでいる傾向にあった。B町についてはこれらの傾向は認められなかった。

地域別で見たところ、「しつけを行う」の項目ではB町

表4 育児期間中の父親の役割と思うこと(複数回答)

項目	A市		B町	
	父親 (n=143)	母親 (n=144)	父親 (n=70)	母親 (n=71)
妻の良き理解者となる	90(62.9%)	106(73.6%)	39(55.7%)	49(69.0%)
仕事で収入を得る	86(60.1%)	85(59.0%)	43(61.4%)	32(45.1%)
妻の話し相手になる	78(54.5%)	77(53.5%)	39(55.7%)	39(54.9%)
しつけを行う	71(49.7%)	69(47.9%)	37(52.9%)	25(35.2%)
(直接的な)育児支援	62(43.4%)	91(63.2%)	26(37.1%)	48(67.6%)
家庭を見守る	49(34.3%)	50(34.7%)	26(37.1%)	19(26.8%)
家庭内の家事を行う	24(16.8%)	33(22.9%)	12(17.1%)	10(14.1%)
家庭内における決定を行う	23(16.1%)	25(17.4%)	17(24.3%)	9(12.7%)

2検定: * p < 0.05, ** p < 0.01, *** p < 0.001

表5 父親の育児参加への評価

項目	A市		B町	
	父親 (n=143)	母親 (n=144)	父親 (n=70)	母親 (n=71)
十分	22(15.5%)	55(38.5%)	12(17.1%)	21(29.6%)
どちらかといえば十分	77(53.5%)	64(44.1%)	35(50.0%)	36(50.7%)
どちらかといえば不十分	43(30.3%)	22(15.4%)	17(24.3%)	11(15.5%)
不十分	1(0.7%)	3(2.1%)	6(8.6%)	3(4.2%)

のみ父親、母親との間に回答率の違いが見られた($\chi^2 = 6.58, p < 0.05$)。

核家族、拡大家族それぞれについても分析を行ったが傾向に違いは見られなかった。

父親の育児参加への評価(表5)として、父親自身の評価より母親の評価の方が高くなっており「十分」「どちらかといえば十分」をあわせた割合は約80%と父親自身の評価である約70%より高くなっていた($\chi^2 = 10.18, p < 0.01$)。

考察

1 育児参加に対する意識

育児についての勉強や立会い分娩を行った父親は育児参加への積極性が認められるのではないかと予測していたが本調査からはそれを見出すことは出来なかった。

父親も直接的な育児に参加すべきかという質問に対して「そう思う」と回答したのは父親では約60%、母親では約80%と約20%の差があり、父親は子供や母親に対して保護的な関心を強く抱いていたものが、子供が大きくなるにつれて次第に関心を薄め、母親を支援、協力する体制を緩めていき³⁾、父親は社会的役割に重点をおいて行くものと推測される。また、父親の育児は社会文化的な要素が大きく⁵⁾、社会的な要求を優先せざるを得ない状況にあるといったことも考えられる。

「子供と一緒にいたい」「父親の関わりは育児に大切」といった回答が多いことから、母親の協力を意識したものではなく、子供への関心に視点を置いて行動をしていると思われる。しかし、これは否定することなく子供とスキンシップをはかろうとしている行動であり、愛着形成に重要なものである。このスキンシップから父親としての役割を感じ取ってもらえるように促して行くことが大切である。

2 育児行動

父親の直接的な育児行動として「話し掛ける」「抱っこする」「入浴させる」「目を見つめる」などで半数以上の父親が「よく行っている」と答えたのに対して「寝かしつける」「おむつ換え」「散歩に行く」などは低い割合となった。このことより、父親のよく行う行動は比較的に手間と時間がかからないものであることがわかる。また、笑顔などの反応が返ってくることから、父親にとっても楽しく喜びの伴う関わり⁶⁾であり、子供の反応に対する興味によるところが大きく、主体的に行いやすい行為と思われる。

3 育児期間中の父親の役割

父親、母親の考える育児期間中の父親の役割は「妻のよき理解者となる」「妻の話し相手になる」という項目が高い数値を示しており、共に精神的な支持を重要視していることが分かる。父親には妻の理解者としての精神的支援者となることが求められており、この役割を果たす事が、母親の育児機能を安定して発揮するために必要な条件と考える⁷⁾。このことは妻とよくコミュニケーションを図っている父親の方が妻の評価が高くなる傾向からもうかがうことができる。

上記以外に母親は家事などの間接的な育児ではなく直接的な育児支援を望んでいることが示されていた。また、「仕事で収入を得る」の項目は60%以上の父親が役割であると認識しており、仕事による家庭貢献という意識が表れているものと考えられる。一方、「家事」と言う項目は父親、母親ともに低い回答率にとどまっており、母親は家事を肯定している表れではないかと思われる。少数であった「家事」を望んでいる母親は共働きの場合がほとんどであった。これらの結果は育児を行ってきた1~2年間で夫婦それぞれの役割意識が定着したためではないかと考えられる。

4 父親に対する評価

全体的な評価として「十分」「どちらかといえば十分」と回答した母親が80%以上を占めており、父親に対する評価は全体的に高かったように思われる。父親自身の評価が母親の評価より低くなったのは、育児に従事している時間が圧倒的に母親の方が長いこと、自身の自己評価を「十分」と評価しにくかったことが推測される。

父親の育児行動と母親の評価の間には関連が見られず、子供の話をするなどのコミュニケーションがよく図られていることで評価が高くなる傾向が認められた。また、父親の役割として「妻のよき理解者となる」が最も高いことから、父親に対する評価には家事や直接的な育児行動に対する協力度でなく、むしろ夫婦間の信頼度が重要になってくるものと考えられる。洪井ら⁵⁾の研究からも「育児姿勢を高く評価された父親は、妻とのコミュニ

ケーションが上手で妻を精神的に支えている夫である」としており、本調査の結果もこれを支持するものと考えられる。

5 父親の育児参加を促すには

核家族化による育児支援体制が低下してきている現在において、父親の協力は必要不可欠であり、協力を促していくよう、行政の支援などが必要かと思われる。また、父親の参加を促す方法として父親としての準備期(妻の妊娠中)から育児の大変さ、母親への負担の大きさ、精神的支援の必要性などを理解してもらうことが必要であろう。特に核家族の場合には精神的支援の必要性を理解してもらうことが大切である。そのためには、父親が参加しやすい休日や夜間開催の両親学級の普及や、より興味を持って参加できるよう内容の充実などを図り、積極的に父親への教育、指導を行える場を提供していくことが必要と思われる。

また、育児開始後の状況(育児参加状況、意識など)を把握するように努め、その程度の低いものに対しては積極的に意識改革を行っていくことが必要である⁸⁾。また、恒次ら⁷⁾は「母親への保健指導のみならず、父親に働きかけることで家庭全体の状況を改善していくことが期待できる」としており、父親にも働きかけることが必要かと思われる。そして、父親だけでなく母親にも楽しみながら育児を行えるように働きかけることが大切だと考える。

今回のアンケート結果から、A市とB町の間で家族構成や職種といった一部において違いが認められたが、育児に関する行動、意識について地域間における違いを見出すことは出来なかった。これは育児期間が長期になり、父親の行動や意識が定着してきたために地域差が認められなかったのではないかと考えられる。

謝辞

本調査にあたり、アンケート配布に協力いただいたA市、B町の保健センターの皆様、アンケートにお答えいただいた、お父様、お母様に深謝いたします。

参考文献

- 1) 宮中文字, 松岡知子, 大城洋子, 前川一代, 他(1993)父親の育児参加と意識との関連.母性衛生, 34(1): 57 - 63.
- 2) 川井尚, 庄司順一, 千賀悠子, 堀口貞夫, 他(1991)育児における父親の役割に関する研究 総括報告 . 平成3年度厚生省心身障害研究(高齢化社会を迎えるにあたっての母子保健事業策定に関する研究)報告書: 328 - 333.
- 3) 大藪奏, 前田忠彦(1993)母親の育児満足に影響する父親要因などの分析.平成5年度厚生省心身障害研究(少子化時代に対応した母子保健事業に関する研究)報告書: 135 - 139.
- 4) 高橋種昭(1993)父性不在の子育て.小児保健研究, 52(4): 411

- 5) 渋井展子, 加我牧子, 白井泰子, 山本正生(1997)乳幼児期における父親の育児の実態とそれに対する母親の評価.小児保健研究, 56(2): 178 - 179.
- 6) 藤田峰子(1993)生後2~3ヶ月児を持つ父親の育児参加の実態調査.母性衛生, 34(1): 5 - 13.
- 7) 恒次鉄也, 川井尚, 庄司順一, 横井茂夫, 他(1993)育児における父親の役割に関する調査研究.平成5年度厚生省心身障害研究(少子化時代に対応した母子保健事業に関する研究)報告書: 121 ~ 130.
- 8) 佐藤直美, 小関真美(1992)早期の父子関係形成における父親の育児行動と児に対する愛着との関連.母性衛生, 32(4): 652.

Abstract

Fathers' Modes of Thinking and Behavior in Childcare

Hisato IGARASHI and Sumio IJIMA

Fathers with infants were surveyed by questionnaire to determine their modes of thinking and behavior during childcare. The wives, that is, the mothers of the infants were also surveyed by questionnaire to identify any differences between the mothers and fathers.

Mothers and fathers with 1-2 years old infants living in city A(rural area; 348 parents) and town B(near the Prefectural capital; 143 parents) in Yamanashi Prefecture were the subjects of this survey. In city A, the survey was conducted using by mailing. In town B, questionnaires were handed out to mothers with 1-2 years old infants at the time of their periodical health-checks.

In the case of direct support of childcare by fathers, there were significant differences between the answers of fathers and mothers. Mothers wanted more direct support from their husbands in childcare(city A: $p < 0.01$; town B: $p < 0.001$). Both mothers and fathers considered understanding husbands to be very important for the wives' emotional stability in childcare.

Key words: father, childcare, infant, behavior in childcare .